

クリストファー・アレグザンダー著"THE NATURE OF ORDER"に関する研究

「生命」・「全体性」・「中心」の概念と「15の根本的特性」の考察

正会員 ○貝野 悠*
 同上 中谷 礼仁**
 同上 船橋 耕太郎***
 会員外 木村 貴志****
 同上 大咲 雄生****

全体性 形態 部分と全体
 配置 構成 翻訳

1 はじめに

クリストファー・アレグザンダーは 1977 年公開の『パターン・ランゲージ』¹など数々の建築理論著書を発表し建築界に多大な影響を与えた。そして『パターン・ランゲージ』発表後およそ 30 年を経た 2002 年に新たな理論書である"THE NATURE OF ORDER"²が公開された。同書は Book1 から Book4 の計 4 冊にわたる大部であり、現在、大阪市立大学を中心にして、"THE NATURE OF ORDER"の翻訳を継続中である。そこで本研究では未だ日本で紹介されることのなかった同書のうちその Book1 をとりあげた。その中で示された主要概念である「生命」「中心」「全体性」「15の根本的特性」³の概念を確認し、さらに「15の根本的特性」の中で異質な特性であると考えられる「適切な形状」を考察すること―「適切な形状」を備えたものとそうでないものの比較―によりこれらの概念を検証することを目的とする。

2 "THE NATURE OF ORDER" Book1 の主要概念

2-1 「生命(life)」の概念

アレグザンダーが同書で示した「生命」とは、事物・空間に備わる秩序を評価するための指標である。これまで「生命」という言葉は一般的にほとんどが個々の有機体の「生命」として定義され、無機物に対する表現としては受け入れがたい概念であった。しかし、アレグザンダーは同書において、あらゆる事物と空間との連続体は「生命」を持っているとしている。つまり、石や木や人といったこの世の全てのものは「生命」を有しているという。それは人が事物や空間に対して抱く感情によって評価されるという。このように「生命」の感覚は主體的な判断によるものであるが、同書では一般性を備えていると指摘している⁴。また、「生命」は特定の度合いを有した指標であり、ある事物が周囲の要素に対してよく適合している時、「生命」の度合いは比較的大きくなると述べる。同書の中では、腰壁と植木鉢の関係の例を用いて論じている(図1)。図の場面において、「植木鉢がある場合」は「植木鉢がない場合」に比べて「生命」の度合いが強いと



図1 腰壁と植木鉢
 出典"THE NATURE OF ORDER" p. 114

ている。それは、植木鉢は腰壁を含んだ周囲の要素に良く適合しているためであると指摘している。

2-2 「全体性 (wholeness)」と「中心 (center)」の概念

「生命」を具体的に認識するための構造として「全体性」が挙げられている。「全体性」とは事物を一つのものとして見なした時、事物を規定する構成要素の関係の仕組みであると定義されている。アレグザンダーは、ここで「中心」という概念を用いて「全体性」を説明している。ここで定義された「中心」とは、重心というような中心点を示しているのではなく、境界の不明瞭な領域を表わしている。「中心」とは「全体性」を構成する要素であり、二つの特徴―完結した全体、他の全体における部分―を備える。同書ではノミを例に出して「全体性」について論じている(図2)。ノミの各構成部分(「中心」)はノミの全体の中で適した役割に応じた、適切な形と配置を備えている。建物においては建物を孤立した断片ではなく、境界を超えて、他の建物を含んだ世界の一部であると捉えている。それは各部分が部分でありながら全体に適合しているためである。つまり「全体性」とは、ある事物を一つの完結した全体として捉えずに、その周囲の事物との連関といった更に大きな全体が包括している状態である。そして、この「中心」と「中心」が関係性を持つことで「全体性」が生じ、「生命」の度合いが高まるとしている。前述の植木鉢の例(図1)においても、腰壁と植木鉢は個々に完結した事物としてではなく、周囲との意味的連関によって良く適合した全体と捉えられるため、その場面は「全体性」を備えていると分かる。

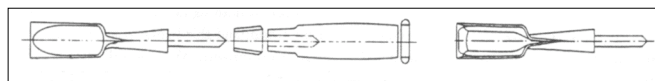


図2 ノミの構成要素 出典"THE NATURE OF ORDER" p. 406

3 「15の根本的特性(FIFTEEN FUNDAMENTAL PROPERTIES)」

- 1 「大きさの段階性」-LEVEL OF SCALE-
- 2 「強い中心」-STRONG CENTER-
- 3 「境界」-BOUNDARIES-
- 4 「交互の繰り返し」-ALTERNATING REPETITION-
- 5 「ポジティブスペース」-POSITIVE SPACE-
- 6 「適切な形状」-GOOD SHAPE-
- 7 「部分的対称性」-LOCAL SYMMETRIES-
- 8 「深い噛み合わせと曖昧さ」-DEEP INTERLOCK AND AMBIGUITY-
- 9 「コントラスト」-CONTRAST-
- 10 「グラデーション」-GRADIENTS-
- 11 「ラフネス」-ROUGHNESS-
- 12 「反響」-ECHOES-
- 13 「ヴォイド」-THE VOID-
- 14 「シンプルさと内なる穏やかさ」-SIMPLICITY AND INNER CALM-
- 15 「分離しないこと」-NOT-SEPARATENESS-

表3 「15の根本的特性」

前述のように、事物や空間に「生命」を持たせるには「中心」と「中心」との間に幾何学性を含んだ関係性を持たせることが必要であるとしている。アレグザンダーは「全体性」を持たせるためのその関係性を「15の根本的特性」としてまとめた(表3)。これら15個の特性はそれぞれ独立しておらず、互いに部分的に依存し合っているという⁵。次に「15の根本的特性」の内、一つを例に挙げる。

3-1「1. 大きさの段階性(LEVEL OF SCALE)」

「中心」に大きさの段階性を持たせることで「中心」どうしに関係性を持たせ、「全体性」が形成される。図のマティスの絵では女性の背中、頭、花という様に「中心」の大きさに段階があるため「生命」があるとされている。

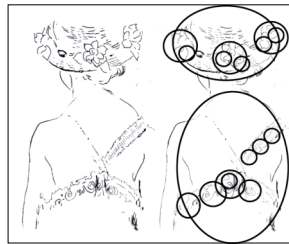


図4 マティスのドローイング
(右図の「中心」の円は筆者による)
出典「THE NATURE OF ORDER」p.146

4「6. 適切な形状(GOOD SHAPE)」に関する考察

ここで、15個の特性の中で「全体性」の在り方そのものを示している特性として「6. 適切な形状」を挙げることができる。

4-1「適切な形状」

「適切な形状」を有した事物は、シンプルで且つ「15の根本的特性」を有した部分で構成されている。アレグザンダーは、その事例として茶卓をあげている(図5)。

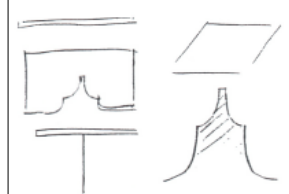


図5 茶卓とそれを構成する要素
(上図:「適切な形状」を備えた茶卓
下図:「15の根本的特性」を備えた茶卓の要素(中心))
出典「THE NATURE OF ORDER」p.181

4-2「適切な形状」の異質性

「適切な形状」では他の14個の特性と異なる質が確認できた。以下に挙げる2点である。

- ・「適切な形状」は「中心」と「中心」の間関係性について述べられていない。
- ・「適切な形状」は他の特性なしでは成立しない。

しかし、アレグザンダーは同書の中で、「適切な形状」のこのような性質については深く言及していない。

以上のことから、アレグザンダーが提示した「適切な形状」の悪い例を用いて「適切な形状」を読み解きたい。

4-3「適切な形状」の読解

「適切な形状」は「15の根本的特性」を有した「中心」で構成されている状態であることは既に上記した。さらに「15の根本的特性」は「全体性」を形成するものであった。したがって、「適切な形状」を持つ事物は、各々に「全体性」を備えた「中心」で構成されている状態であることがわかる。茶卓の例でも、脚は茶卓の脚でしかない形態と配置をしている。もし各部分に「全体性」が無

ければ、図6のような茶卓になってしまうことも考えられる。これを茶卓と呼ぶことは難しいであろう。ここで、復元の容易さと困難さを適切と不適切の指標として考えてみる。アレグザンダーは「適切な形状」の悪い例として未来

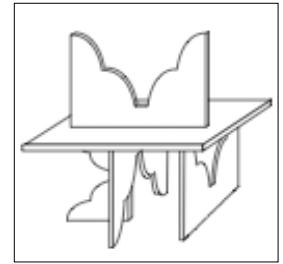


図6 不適切な配置の茶卓(筆者作)

志向の椅子(図7)を挙げている。そして、この椅子の構成部分は妥当性のある形態を備えていないと指摘している。したがって、この椅子を「中心」に分解しても、再度同じ状態に戻すことは困難であると考えられる。このことから、「適切な形状」は構成要素が「全体性」を備えた「中心」であるため、それぞれの役割に適した配置ならびに形態を施された状態を意味しているといえる。それは他の特性が形成した全体を更に大きな「適切な形状」による全体の中に包括する状態であると指摘することができる。



図7 未来志向の椅子とその構成要素
出典「THE NATURE OF ORDER」p.181

5 結論

以上より、「適切な形状」という特性を考察することによって「全体性」と「中心」の関係を「形態の復元の可・不可」の関係性と読み替えることができた。

ここでは、「THE NATURE OF ORDER」Book1 part1の中の新たな概念の内容に留まった。次稿では、ここで確認した概念を踏まえて、アレグザンダーのこれまでの理論の変遷における「THE NATURE OF ORDER」の位置づけを行いたい。

¹ アレグザンダーは建設の共通言語をつくることによって使い手と造り手のあいだに介入する余分な個性(既成建築家)の代りに、より公明な修正に耐えるコミュニケーション道具としてのボタン・ランゲージを提案した。人々が「心地よい」と感じる空間を分析して、253のボタンにまとめた。

² 「THE NATURE OF ORDER」(2002-2005)は全4書で構成されている。さらにBook1〔PHENOMENON OF LIFE(生命という現象)〕はPart1とPart2で構成されており、本研究はPart1を対象とする。同書では「生命」という概念を定義し、「生命をそなえた現象とは何か」が記述され、生命を備えた幾何学的な特性「FIFTEEN FUNDAMENTAL PROPERTIES」が述べられている。

³ 「THE NATURE OF ORDER」Book1 Part1の目次は次の通りである。

「1. THE PHENOMENON OF LIFE」「2. DEGREE OF LIFE」「3. WHOLENESS AND THE THEORY OF CENTERS」「4. HOW LIFE COMES FROM WHOLENESS」「5. FIFTEEN FUNDAMENTAL PROPERTIES」「6. THE FIFTEEN PROPERTIES IN NATURE」

したがって、目次からも読み取れるように「生命」「全体性」「中心」「15の根本的特性」が同書の主要概念とわかる。

⁴ 同書では、二枚の写真を並べてどちらに「生命」を感じたかという被験者実験を行い、9割の人が共通した「生命」の感覚を持つという結果を得ている。

⁵ アレグザンダーは15個の特性の相関関係を表わした行列表を用いて、特性どうしが部分的に依存し合っていることを示している。